

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	ウィーン国立民族学博物館蔵『西行記』（春・夏）解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2006
Jtitle	三田國文 No.43 (2006. 6) ,p.35- 53
JaLC DOI	10.14991/002.20060600-0035
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20060600-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィーン国立民族学博物館蔵

『西行記』(春・夏)解題・翻刻

辻 英子

はじめに

二〇〇六年三月に、幸いウィーン国立民族学博物館 (Museum für Völkerkunde) のご配慮によって日本関係資料の調査の機会を与えられた。三年間にわたる改修工事のため一般には公開されていない中、粉塵の舞う建物をくぐり、地下収納庫での調査であった。そこで発見したのが、『西行記』四巻で、静謐な画風に詞書も風趣の漂う筆は、この絵巻の真髄を余すところなく伝えてくれる。清楚な修練された迫力のある画面の調査を終えて、学芸員にその旧蔵者名を尋ねると、オーストリア・ハンガリー帝位継承者フランツ・フェルディナンド大公の所蔵 (Erzherzog Franz Ferdinand von Österreich-Este) と言うことで、このたび百数十年ぶりに日の目を見ることになったのである。当館に寄贈されたのは一八九二年、第一次世界大戦の導引となった大公夫妻が、ボスニアの首都サラエボ市でセルビア人青年プリンツィプに暗殺される以前のことになる。しかも二〇〇六年四月五日付で、同館長 (Prof. Dr. Christian F. Feest 氏) から、絵巻発見への丁寧な感謝と掲載許可書とが寄せられ

た。調査を始めて二週間そこそこの異例の厚遇に、当館の学芸員も驚き、私自身も深く感謝申しあげている。

朱題簽に春・夏・秋・冬と記す四巻、絵総数四十九図からなる本絵巻四巻の出現は、「西行物語絵巻」研究史上からも感銘深いものがある。西行に関する研究は、すでに昭和十年代後半から佐佐木信綱博士ほかの先学による研究があり、国文学界に寄与するところ少なくなかった。近年、『西行全集』の編者久保田淳氏は、西行について次のように述べている。

彼は在原業平・能因・行尊らの文学的血脈を引き、天与の資質と果敢な行動によって豊饒な和歌表現の世界を実現し、これを宗祇・芭蕉へと伝えたのであった。それにとどまらず、その生の軌跡はさまざまな形で思い描かれることによって、一個の人間のこの世における生の意味を考える手懸りを後代の人々に与え続けてきた。そして、これらの事情は今後も変わらないであろう。西行の文学はその意味において、永遠に新鮮であり、それゆえにこそ古典と呼ぶにふさわしいものである (三頁)。

同書によれば、『西行物語』の諸本は、(一) 文明本系統、

(二) 正保板本系統、(三) 海田采女本系統、(四) 永正本系統に分けられ、(三)は『統群書類従』第三十二上、(四)は『室町時代物語大成』第五などに収められている(貴重本刊行会 平成八年十一月 三版〈初版昭和五十七年〉 九六〇頁)、『西行全集』には(一)と(二)の重要伝本五本を収載している。今ここに諸本の詳細を述べる意図はないけれど、一覽して、ウィーン国立民族学博物館本の本文は、(三)系統に属することを知る。

鎌倉時代以降、いくつかの「西行物語絵巻」がつくられた。

(三)は、明応九年(一五〇〇)十月に、著名な絵師海田妥女うづなめのおとよ佑源すけみね相保所筆の識語を有し、いつのころか禁裏に伝えられていた。川瀬一馬氏の立てた分類によると采女本は、(一)第三類本(絵巻四巻本)に該当する。同氏によると、「江戸期に入って西行物語絵巻として紹介せられ、書写されてゐるものは、多くはこの系統本で、(略)統群書類従巻第九百四十一所収の西行物語絵巻は、元禄刊本と同一の本文である」(『日本書誌学の研究』講談社 昭和四十六年 九七五・九七六頁)、とする。

『西行物語絵巻』に関しては、久曾神昇氏(『西行物語』・『書誌学』一四一四、「西行文献叢刊解題」・『西行全集』昭和十六年二月)・川瀬一馬氏(『西行物語の研究』・『日本書誌学の研究』昭和十八年六月)の分類をもとに、千野香織氏が作成した『日本絵巻大成26』所収の『西行物語』諸本の分類(「表I」、一五三頁)及び『西行物語』諸本の異同(「表II」、一五三頁)がある。

諸本の中の采女本について、小松茂美氏は、「原本は伝存不明であるが、宗達の模写が最も有名で、所収の渡辺家所蔵本もそ

の一つである」(前掲書)としている。渡辺家本(小松茂美編

『日本の絵巻19西行物語絵巻』所収 中央公論社 一九八八年)も室町時代作と考えられる海田采女佑本を転写したものである。

これらの先行研究に照らし先述のように、ウィーン国立民族学博物館本は、采女本系統に属する。ただし、渡辺家本および『統群書類従 第三十二上』所収本に比べても、話の順序に異同があり、錯簡もあるが、古い表記を留めている点が目される。例えば、「眼にさいきらすさいきらす(渡辺家本・統群本、同じ)」「(巻春、第1紙第9行)は、「さへきる」より古い表記とする説が有力であり、「わかちわかち(「ち」渡辺家本・統群本)かとおもふに」(「巻冬、第15紙7・8行)の「ち」は上代語の尊敬語で父の敬称。まろがち(記・中・歌謡)の例がある。また院・帝に関する描写に先がけ一乃至二文字分の余白を設けることは例外なく行われており、模写の正確度は高い(↓挿図)これらの詳細については後に、研究編で報告する。松・梅・桜・紅葉などの樹々の描写で、枝ぶりのうねりの線に狩野派の特徴がよく現れているように思うが、これについては美術の専門家の知見に委ねたい。

本絵巻の特徴は、春・八図、夏・十四図、秋・十六図、冬・十一図、絵総数四十九図で、絵が多いことにある。小松茂美氏は住吉具慶(一六三一―一七〇五)の手によって書写された東京国立博物館蔵の一模本について、次のように述べている。

この具慶写本の巻頭には、画面の前に一紙の張り紙がある。江戸中期以降のものである。それによれば、「西行記 秋之巻 画土佐光信筆 註梅園季保筆 此巻々絵十六枚

有」と書かれている。もと、この原本の一巻は、「西行記秋之巻」と呼ばれていたらしく、江戸中期のころには、諸伝を失つて、絵は土佐光信（一四三四—一五二五）、「註」（詞書）は梅園季保（正三位・参議。一六四六—一九一）の筆という。しかし、これは撞着もはなはだしいことは、自明であろう。（『日本絵巻大成26』一七八頁）

右の、「撞着もはなはだしい」の内容については、明らかにされていないが、光信と季保とが時代を異にすることを言うのであるうか。この四巻本については、「もと、春・夏・秋・冬の各巻に名づけていたものか」ということは小松茂美（前掲本一七九頁）及び川瀬一馬（『日本書誌学之研究』九七六頁）両氏によつても言われており、この四季による分類方法は、スペンサー・コレクシオン蔵『源氏物語絵巻』にも見られ（拙著『在外日本絵巻の研究と資料』笠間書院 一九九九年、めづらしいことではない。ただしここで注目すべきは、具慶写本の巻頭に付された張り紙の記述は、ウイーン国立民族学博物館本秋の巻の挿図十六図に符号することからも、この形態の「西行記秋之巻」は間違ひなく存在したのであるうと考えられる。ただし、ウイーン国立民族学博物館本の秋の巻には、現状では奥書もないので、具慶模写本の巻頭に付された貼紙に記された、現在「所伝を失つて」いるという光信・季保筆と伝えられる絵巻との関係は不明であるが、江戸中期頃に所伝を失つたという「西行記秋之巻」は、ウイーン国立民族学博物館本に極めて近い形態であったと推定される。

渡辺家本は、今は所在不明となっている海田采女佑本によ

り、依屋宗達（生没年不詳）が模写したとされる。現状では、ウイーン国立民族学博物館本の方が画数は多く、対応する場面を比較すると、衣服など多少色の違いは認められるものの、構図や描写は一致し、宗達は模写に当たつて忠実に筆を費やしていると見られる。ウイーン国立民族学博物館本の存在は、海田采女佑本原本との関わりをも含めて、采女本系統諸本の復元に当たつても期待される史料であろう。

一 書誌

書誌の概要を記すと、次のとおりである。

卷子本。函架番号113.892～113.895。表紙は藍色地に金泥で牡丹・唐草の模様を織り出した金欄緞子。左肩に朱色に金泥で霞を引いた紙題簽に墨書で「西行記 春（夏・秋・冬）」と記す。見返しは金紙に金箔を置く。巻春の題簽は「冬」の文字の下の部分が剝離、巻夏は、「西行記」と「夏」の間に亀裂が入る。巻秋・冬（三・七×二・七）は原型を留めている。各巻とも奥書はなく、書写年時は不明である。料紙は緒紙、象牙の軸に紫色の平打ち紐が付いている。書体は清恬静謐。本絵巻の詞書も絵も筆者は一人と見られる。

縦（糲）×全長（米）・春 三二・〇×二一・〇七五、夏 三二・二×一六・一九四、秋 三二・二×一六・四二五、冬 三二・一×一五・六七五。

春の巻に、一箇所の錯簡がある。「くの事なり」（第20紙第13行）から「はじめなりけれ」（第20紙第16行）にかけての四行の文は、本来「おもはくむや」（第15紙第17行）を受ける文であ

る。「第15紙第17行」の後には紙継ぎがあるので「第20紙第12行」と「第20紙第13行」の間に紙継ぎがあれば、剝離による錯簡に数えられる。ところが紙継ぎはないので、本絵巻は、もともと錯簡のあった底本を写した可能性が高いと考えられる。また、「とし月をいかてわか身のをくりけん」(第20紙第12行)の後に「きのふみし人けふはなきよに」の一行が落ちていると想定される。この場合も、同箇所に紙継ぎは認められないので、本絵巻は原本ではなく、模写本の証に数えられよう。また、「夏」の巻における「第18紙第1行」「寂蓮入道」の下に続群書類従本および渡辺本には「の」の字がある。また、「仙人なと」(第27紙第16行)の「と」は装丁にあたり裁断したためか、下部はなく、判読による。こうしたことから推して、前者は本来「の」を有した可能性は高い。また、「おもふなに事」(第19紙)の字句が「絵九」(第20紙)の上にならされているのも模本の証に数えられようか。全体にわたる詳細は後に述べるとして、本稿は、「春・夏」の詞書の現状報告を行おうとするものである。

ウィーン国立民族学博物館蔵『西行記』詞書

(春)

夫一如法界のことはりをそむき

二種生死の闇にいりしよりこのかた

妄深のちりにふうせられて自性
しうくのはちすひらけす煩惱の雲
におほはれて本覚真如の月弥々
くらししかるあひたむみやうの長
夜あけかたくしやうしのねふりさむる
期なくして惑障の雲霧あつく隔
仏日のひかり眼にさいきらす六しゆ
四しやういづれもみなへたりといへ共
三途八難それつねのすみかたる
ものをやこゝに億々万劫にひとたひ
うけかたき南浮のしやうをうけ世々
たしやうにあひかたき西とのけうに
あへりこれすなはちかうむ一時に
ひらく勝縁りやうはうに得たりしやう
しをいとひ菩提をねかはむ事いま
まさにこのときなり就中うみむしやうの
さかひ生死かきりありしやは電池のさと
老少さためなしとしわかしといふとも
たのしむへからす屠所のひつしのあゆみ
あやうくして死地にちかくよはひ
闌なはいよくおとろくへし雪山のと
りなきてあくるをまつへからす頭上の
ともし火をはらはむかごとく火宅のうち
をいつへきものなりしかるに弟子たまく
恩愛不能断の家をいてたりといへとも

(第1紙)

むなしく弁恩入畏のこゝろなしうれ
しく真実報恩者のすかたたりなから
かなしく流転三界中の業をなすしか
のみならず止観のまとの前ぼたるを
ひろふつとめなければ円頓そく疾の
観念にまどひ玄父にゆかのうへに雪を
あつむるおもひををろそかにして妙法
蓮華の首題をもさとらす身を寂寞
のれんにやによせむとすれは一鉢そこ
むなしくして霞喰くもにふす思ひあり
心を造像卦塔にかけむとすれば三衣かた
やふれて巧匠をかたらふにちからなし世
善といひ行業といひ坐禅といひ観心といひ
かれにもゝれたりちこくといひ餓鬼といひ
畜生といひ修羅といひこれにもおち彼
にもむまれぬへしかなしひのかなしひ
何事かこれにすぎむや但惑文みるに
一念発起菩提必勝於造立百千塔といへり
今この説を聞にいさゝかうれへをやす
むといへとも一念の道心をゝこさむ事
これ又かたきものなりしかるあひたなにを
縁として此発心をもとめいつれのところに
して此菩提をとるへきといふに仏種は
縁よりをこりとくたつは宿報による
いはゆる綱をひく家をつくづくはん念をも

するあり困暮をうち詩を詠して仏
道をさとるともからもあり和湏密たか
姪に梵行提婆達多之邪見即
正是みなあく業によりて菩提をさとる
たくひなりいはむや自余事にをひて
をやいはむや善業にをひてをやこゝに
我国の風俗としてやまこと葉といふもの
あり狂言綺語のたはふれたりといへとも
ほつしむ求道のつかひなり秋の月の雲に
かくるゝしんによの月の煩惱の雲にかくるに
似たり春のはなの風にちるをゝし
む身の栄の花のむしやうのかせに
をさるゝをさとるたよりなりこれにむかへ
はせえん俗念のいそきわすられこれを
あむすれば散乱鹿動の心もしつまる
つみには念仏のおもひにちうして
むしやうのことはりをさとる聚落中練若
もともこの事にあるをやかるかゆへに
しやうとく君はくせ大士なりかたをか
やまの詠をもてみちのほとりの飢人に
たまひ行基ほさつはもむしゆの化身也
迦毘羅衛のことはをのへて天ちくほ
さつにしやすこゝにしりぬ大智なを此
国にあそひたまふにはわかくにの風を
すて給はずといふことをこれによりて六の

(第2紙)

すかたをまなふにたらされ共ときくこの
みちにおもむくへきひとつのふしをつくる
にをよはすおりくかの風をまなふこれ
すなはち厭離ゑとの助縁出離生死の

らむしやうなりしかるあひた一人の先達を
もとめて二事のきうせきを尋んとする (第3紙)

処に鳥羽院の御時北面にめしつかはれける

佐藤兵衛尉範清と申武士ありけり心の
たけき事将門保昌かあとをつきてなら
ふ人すくなく数万騎の中へも一人して

かけいらむ事をよろこひおほかた弓箭を

とりてはやう遊かかないつきをつたへて空

とふ鳥類くかを蹴心にまかせてはつ

す事なく詩哥管弦のかたに「業平

紀納言のなかれをくみて三公九卿の末座

にめされて日をよ(く)ノ誤(く)らし諸道に長せるもの

は朝家のたからとさためられ出仕のよそほひ

郎従眷属牛馬六畜につけてともしき事

なく頂達かいきをひかとみえきことさら仙

洞祇候の時は 勅定のおもむきをたかへ

しとにはをあたゝめてうれへをのへ退

出のいとまをたまはらさりしおりはゆかを

まもりて夜をあかし(脱文カ)

はなのもとのあそひ月の前の詠かゝりの

したのまり宮の中のと弓の御会には

まつめされてその座に名をとゝめしかは
君もこれひとりたに候はゝとおほしめ

していそぎ廷尉になしたまふへきよし御
気色あれとも心のうちには世中のはか

なきことをくはんしいかなる坂上の正相は

夢に地獄におつる官とみて権非違使

にならしとて五位のかうふりを給てこの世

の望をすてけるそとおもひて妻子珍宝

及王位臨命終時不隨者唯戒及施不放逸

今世後世為伴侶とこゝろにかけて花山 (第4紙)

の法皇はこの文のゆへにこそ十善の位を

すてゝ紀伊国勢無利のはまにおもむ

きて那智山にをこなひ給てつゐに

仏道にいらせ給てけれ煩惱の黒肝

あつくしてみやうりの家の犬うてとも

いてやらす因果の白毫くらくして菩提

の山の鹿まねけともきたらすとみ(め)ノ誤(め)るを

きゝてはうらやみまつしきをみてはあき

けり夢のうちのたのしむ波のうへの月しつ

まりかたき心のみしてふゆうの(破損「む」カ)朝(し)

にむまれてゆふへにしするなをたのしみ

ありいつるいきは入いきをまたすして命

をとちめ五欲のつなにひかれてつゐに

ならくのそにしつまむ事と竜樹

菩薩はとめりといへともねかふ心やまねは

まつしき人とすまつしけれともねかひもと
むる心なけれはこれをとめりとす書写の上人
もひちをかゝめて枕とするにたのしみその
うちにありなにゝよりてかささらに浮雲の
栄耀をもとめむとかけり此たひいとす
当来のかなしみなり極楽をねかふ輩
つるに西はうの淨利に往生すたとへは
草木のかせにしたかひてかたふく方へたう
るゝかことしいやしき我身のこは何事に
さはりて片山かけのすまる柴のいほりに
こもりゐさらむとおもひてかくそ

いつなけきいつおもふへき事ことなれば
のちの世しらて人のすくらん

なにことにとまるこゝろのありければ (第5紙)

さらにしも又世のいとはしき

かやうにうちなかくてする程に大治二年
のころ鳥羽院とのへ 御幸ならせ給てはし
めたる御所の御障子の絵おもしろかりける
を御覽してその時の哥讀経信大納言

匡房中納言基俊頼なとめされて我もく

といとなみよまれのなかにのりきよをめされて

このゑともなかにさるへきところともに
哥よみてまいらすへきよしおほせくたされ
ければその日のうちに読つらねて申あけゝる

はつ春の雪つもりたる山のふもとに谷川の

なかれたるところをみて

ふりつみしたかねのみゆきとけにけり

きよ瀧川の水のしらなみ

やまさとのしはのいほりにひしりのこもり
たるまへにむめのさきたるところをかゝれ
たりければ

とめこかしむめさかりなるわかやとを

うときも人はおりにこそよれ

花さきみたれたるしたにゐて月を

なかむるおとこかゝれたれば

くもにまかふはなのしたにて眺れば

おほろに月はみゆるなりけり

なつのはしめ郭公をたつねて山田のはら
の杉のむらたちにゐてなかくめたるおとこ
のかゝれたるを

きかすともこゝをせにせむほとゝきす

山田のはらのすきのむらたち

ほとゝきすのはつ音たつぬるかひあり
てきゝつけたるところかゝれたり
ければ

(第6紙)

ほとゝきすふかき峯より出にけり

とやまのすそにこゑのおちくる

清水のなかれたるやなきのかけに
みつをむすふ女房をかきたりければ

みちのへのしみつなかるゝ柳かけ

しはしとてこそたちとまりけれ
あきのはつ風心ほそくかゝれたり
けるところに

あはれいかに草葉の露のこぼるらん
秋風たちしみやきのゝはら

山田もるいほりのほとりにしかの鳴たる
ところをみて

いほちかくなくや山田のしかのねに

おとろかされておとろかさかな

たかきやまにしら雲のかゝりたる所を
みて

あきしのやと山の里やしくるらむ

いこまのたけにくものかゝれる

おくやまの峯のこすゑ風にさそはるゝ

ところをみて

おくやまのふもとのさとに木のはちれは

木すゑにはるゝ月をみるかな (第7紙)

(絵一) (第8・9・10・11・12紙)

勅撰のかれかたきゆへに御障子の絵の哥

十首日のうちにつらねて 奏し申ければ

よくよく 御覧ありて希代の名哥末代の

規模なりとて其時のてかき定信時信を

めされてそかゝせられける大治二年十月

十一日かとよ 勅ろくにあつかりてあさ日丸

と申御はかせを赤地の錦の袋に入れて頭弁

のうけ給にてそたまはりける又待賢門

院の御かたへめされて権中納言とのゝ御つほ

ねの御奉行にて御はしたものの乙女の前

御うはきかさなりたるくれなゐのにほひ

十五の御衣いたきてかつけられたりければ

みる人めをおとろかしうらやみあさみ

あひたる「^あ」^い「^あ」^い今生の執心とゝまりあはれに

かたしけなくよろこひの涙たもとに

あまりてそおほえける (第13紙)

(絵二) (第14紙)

そのくれにやとへ帰たれはさいし眷属

しむ類兄弟らこのしたいをよろこふけ

色かきりなしこれにつけても世のはか

なき事のみおもはれて出仕のいてたち

はかなくおほえて発心のこゝろそまさり

ける法勝寺の御八講に御幸ならせ給ふ

にのりきよ御ともつかまつりたりけるに

いかなる事かありけむ門かためたる六条

の大夫判官のしもへに兵衛尉の郎等

をとられたるよしをきゝてこていわらは

たゝ一人をくして太刀はかりをはきてしさい

きゝて善悪をしらす申うくるにおしむ

ものならはちり灰にならむするよしを

そむしてむかふところに気色をみてはう

くはんいそきたちてさうなくまいらせ候へ

くくと申てわたしてけりその時郎等お
とこをは範清とりえて帰ておもはくむや

〔絵三〕 (第16・17・18紙)

(第15紙) (錯簡)

おなしく北面にまいりけるあい親左
衛門尉のりやすつかひの宣旨をかう

ふりて夜部とはとのよりうちつれ
てちきるやうあしたにはかならず

ことにきらめきていそきまいり給へ
うちつれ侍へきよし申て七條大宮に

と、まりければそのあしたまいりさま
にさそひければ門に入あまた立さは

きてさまくになきかなしふこゑ

きこえてとのほこよひねしに、しなせ
給ぬとて十の(「九」の誤)になる妻女五十有

余の母こゑもおしますなきかなし

むを聞にいよく、かきくらす心ちし
て風の前のともし火はすのうき葉の

露ゆめのうちの夢とおほえて

やかてそこにもと、りをきらんと
おもへともいま一度きみにまいりて

いとま申さむとおもひなりてこまをはや

むるに袖の涙はさきにたちけりそもく
この人は二年のあに、て生年廿七そかし

をくれさきたつためしあはれにおほえて
かくそみちくになかめける

朝有紅顔誇世路 暮成白骨朽高原

こえぬれは又もこの世に帰こぬ

してのやま路そかなしかりける

世中をゆめとみるくはかなくも

猶おとろかぬ我こゝろかな

とし月をいかてわか身のをくりけん

くの事なり身をいたつらになして

悪道におちてなかくうかむ事ながら

ましとおもふよりしてこそいと、ほつ

しむのはしめなりけれ (第20紙) (20・13、16錯簡)

〔絵四〕 (第21紙)

ことにきらめきてまいりたりければ人く
めおとろき君もいみしくおほしめさるゝ

ところにおもはずに頭辨にて出家のいとま

を申いれたりければことにおとろきおほし

めしてさらに御ゆるされなかりけれ共

龍顔にちかつきたてまつりて 宣下の御

ことはをみゝにふれむ事只今はかりなり

関白三公をみあけて御まなしりにかゝらん

事はけふはかりなり同僚座れちに

きしきをさためつる北面は今そかきり

なる 仙院の御あそひ南庭のさくら池の

ほとりの落葉月の前のなかめにははつ

れすめされつる事をおもひつゝくるに
涙もとゝまらねとも心つよくおもひとり

てまかりいてゝおもふやうさてもすきぬる

二月にすてに出家は一ちやうと思ひて

かくよみしそかし

そらになるこゝろは春の霞にて

よにあらしともおもひたつかな
(第22紙)

いまたその期やきたらさりけむ二月

もすきて七月に又おもひきりて月

のおもしろかりしにかくそ読ける

世のうさにひとかたならすうかれ

ゆくこゝろさためよあきのよの月

ものおもひてなかわるころの月の

色にいかはかりなる哀そふらむ

をしなへてものをおもはぬ人に

さへ心をつくるあきのはつ風

秋も又のかれてこのくれの出家障なくとけ

させ給へと三宝に祈せい申てやとへ

かへりゆく程にとしころ堪かたきいと

をしかりし四歳になるむすめの縁にいて

むかひてちゝのきたるかうれしきとて袖に

とりつきたるをたくひなくいとをしく

めもくれておほえけれどもこれこそ

煩惱のきつなをきるはしめとおもひ

てゑむよりけおとしたりければなきかな

しみけれどもみゝにもきゝいれすして

うちにいりてこよひはかりのかりの

やとりそかしと涙にむせひてそ

あはれにおほえける (第23紙)

(絵五) (第24紙)

女房はおとこにまさりたりける人

にてかねてよりおとこの出家せん

することわざとりてこのむすめの

なきかなしむを見ても更におとろ

くけしきのなかりけるこそあはれ

にみえける

露のたまきゆれは

又もをくものを

たのみもなきは

わか身なりけ

り (第25紙)

(絵六) (第26紙)

十五夜の月のなかはになるまで涙をなかつて

おもふやう万法は心か所作さらに別のほう

なし人界にむまるゝ事は梵天よりいとをくた

して大海のそこの針のあなにつらぬかむよりも

かたし仏教にあへる事は億劫に一度あへる

一眼の亀の浮木のあなにいらむかことし

このたひ出家をとけて仏道にいらむとおもふ

人木石にあらすこのみはおのつからと

ありあさの中のよもきはためさるに

ゆかます松にかゝるかつらは千いろに

のほるせむたんの林にいるともからはころも
かならずかうはし切利天の菌には歡喜
の色をふくみ蓮華世界の鳥は妙法の

文をさえつるされはみやうもむ驕慢の心を

すて、貪欲慳貪のおもひをわすれ邪見

殺盜の罪をつくらす姪酒妄語の戒をた

もちて念仏さむくゑをこたらすつとめて

ほとけにならむとおもひて涙をなかつ程

に西の山のはちかく月かたふけは只今を

かきりとおもひてとしころの妻女に

あるへき事ともさま／＼にちきれとも

この女はうさらに返事なしさりとてと、

まるへき事ならねは心つよくおもひとりて

年来しりたりける嵯峨の奥のひしりの

もとへその暁はしりつきて出家をしける

こそあはれに心ほそくおほゆれひしり

達あつまりてこはいかにと申ければ

世をすつる人はまことにすつるかは

すてぬひとをそすつるとはみる

うけかたき人のすかたにうかひいて、

こりすやたれも又しつむへき

世をいとふ名をたにもさてと、めをき

て数ならぬ身のおもひ出にせん (第27紙)

(絵七)

(第28紙)

ことしもすてにくれなんとすこそゆく

としのくれしいとなみともさま／＼にせし
事さすかおもひいてられて

としのくれしそのいとなみは

わすられてあらぬさま

なる

いそきをそ

する

をのつからいはぬにしたふ

人やあるとやすらふ程

に

としのくれ

ぬる

年たちかへるいはひ事にはさい

はうにむかひて臨終正念往生極楽

とそねかひけるたかきも賤も正月

のはしめを待えては嘉辰令月のよ

ろこひ万歳千秋のたのしひ長生殿

のさかへ不老門の日月よろこひ

ひらくるあそひつるとかめとのた

はふれ子日の松のかさりわかなのて

すさひわれも／＼とする事は春秋の

夢そかし官位の望珍宝の貯水の

あはまほろしのことしとくはむして此春の

うちに往生をとけはやとそ仏神に

申けるさていほりの前に梅花のさき

たるをみてすきける人のさし入てなかも
ければ

こゝろせむしつかかきねの

むめのはなよしなく

すくる人とゝめ

けり (第29紙)

そはなりけるあむしちにかきねにさき

たりける梅花風にさそはれてかなつ

かしくちりけるをみて

ぬしいかにかせわたる

とていとふらんよそに

うれしきむめの

にほひ

を (第30紙)

〔絵八〕

(第31紙)

(夏)

出家のゝちは世中にしはしもあと

をとゝめむ事をよしなしと思ひて

ふかきやまゝくたうときところゝを

修行しけり花のころ吉野の奥に

まかりて木のもとによりふしてなかも

ほとに風にしたかふさくらひまなく
ちりかゝりて心ならぬはなのうはき
なにとなくなつかしくむかし覚えければ
このもとにたひねを

すれはよし野やま

はなのふすまを

きするはる

風

なかむとてはなに

もいたくなれぬれ

は

ちるわかれこそ

かなしかり

けれ

よしの山やかて

いてしとおもふ

身を

はなちりなはと

人やまつら

ん

(第1紙)

〔絵一〕 (第2紙)

名をえたるやまのはななれはさこそ

おもしろかりけめこけのむしろの

うへにいはねにまくらをかたふけ

てさすかにいけるいのちのたよりに

はたにの清水をむすひみねのこのみを
ひろひて

寂寞無人声 読誦此經典と

よみてにうをしんせんしゆいふつ道
のをこなひ心にあかねともくまのの
かたへまいらむとおもひたちてゆく
みちにいとあはれのみまさりて

世のなかをおもへはなへて

ちるはなのわか身をさても

いつちかもせむ (第3紙)

〔絵二〕 (第4紙)

那智にまいりて瀧入堂し侍りける
に一二のたきおはしますそれへ
まいり侍と申常住の僧の侍りけるに
くしてまいりけり花やさきぬらんと
たつねまほしかりしかりしおりふしにて
たよりある心地してわけいるに一の瀧の
もとにまいりて如意輪の瀧となむ
これを申すといひけりまことにすく
うちかたふきたるやうにそなかれ
たるいよくたうとくおほえて涙も
とまらずそのまへに 花山院の
御あむしつのと侍けるまへにとし
へたるさくらの木の侍けるをみて
すみかとするはとよませ給けむこと

のおもひいてられて

このもとにすみけるあとをみつる

かな那智のたかねの花を尋て

かれたるさくらのとしふりたる枝の

ひとふさきたるに

わきてみむおひ木は

花もあはれ

なり

いまいくたひか

はるにあふ

へき (第5紙)

〔絵三〕 (第6・7紙)

さてやかみの王子にとまりて

いかきのほとりにさきたるはなの

ことにおもしろかりければはしらに

かくそかきける

まちきつるやかみ

のさくらさきに

けり

あらくおろすな

みすのやま

かせ (第8紙)

〔絵四〕 (第9紙)

承安元年六月一日 院熊野へまいらせ
おはしまし、つゝあてに住吉へ 御幸有
けり修行しまはりて三日かの宮に
まいりてみればすみのえのつり殿
あたらしくしたてられたり 後三
條院の御幸神おもひいてたまふらん
かしとおほえて釣殿のはしらに
かきつけ侍し

たえたりしきみか

みゆきをまちつけ

て

かみいかばかり

うれしかる

らむ (第10紙)

〔絵五〕 (第11紙)

そのとしはすみよしにさふらひて
かへる年の春みやこのかたへゆく
とてつのかになにはわたりをすきけ
るにはる風にはかにあしのかれ
はにをとつれてものこゝろほそく
おほえければ

津のくにのなにはの

はるはゆめなれや

あしの

かれ葉に

かせわたる

也 (第12紙)

〔絵六〕 (第13紙)

四天王寺のかたへまいり侍けるに
日くれて江口と申ところをやとを
かりけるにすみそめのたもとをや
あやしくきらひけむやとをかさゝ
りければ

世中をいとふ

までこそかたから

め

かりのやとりを

おしむきみ

かな

遊女の返し

よをいとふ人とし

きけはかりのやと

に

こゝろとむなと

おもふばかり

そ (第14紙)

〔絵七〕 (第15紙)

かやうに修行して又都にかへりきて
昔しりて侍しともをたつねてまかりし
ほとに春にもなりにければ正月二日

志賀の里へ方違にまかりしにあひ
くしてまかりて三日かへりけるに
会坂山のかすみたちたるを見て

わきてけふあふさか

やまのかすめる

は

たちをくれたる

はるやこゆ

覧 (第16紙)

〔絵八〕 (第17紙)

伊勢に侍りしをり寂蓮入道〔歎断〕 (の)
もとへ申遣ける

伊勢の海の人もなきさ

をなかめやりて君きたらはと

おもふなに事

かへし

たひねせしあらし浜辺

も君かためおほつかなしと

おもふなに事 (第19紙)

〔絵九〕 (第20紙)

東の方さまへゆくほとに遠江国
天竜のわたりにまかりつきて舟に
のりたれば所なしおりよと鞭を
もちてうつほとにかしらわれてちな

かれてなん西行うちわらひてうれふる
色もみえておりけるを見てともなる

法師あなちになきければされはこそ

いひしか修行するならひはこれにまさ

る事のみこそあらむすれとてそこより

はなれにけりまことにこのひとの

心にはうつともものるともくるしみと

おもふまし杖木瓦石を忍をもてこそ

道心のほいといふ事なるを又いやしき

ものゝ心には在俗のとき弓箭は金銀

をもてちりはめ衣裳は綾羅をもて

かさり万騎のつわものゝ中へも一人

かけいらむ事を思出仕の時は家のうちに

みくるしからむ物とりをけ人に水

目にははれは我家ありとてかへりく

ましきそなどの給しにさまをかへ

んからにかゝるへきかといやしき心の

おもひやりなきにたもとしほり

けんもにくからすおほゆ (第21紙)

〔絵十〕 (第22紙)

みちの国のかたへ修行してまかりける
時さやの中山をすくとて又こえむこと
も命不定におほえて頼かたかり
しに年へてのちおもひのほかに
誠にかへり侍し事のちありければ

と又さやの中山にておもひいてられ
てあはれにおほえければ

としたけて又こゆ

へしとおもひきや

いのちなりけり

さやのなか

やま (第23紙)

〔絵十一〕 (第24紙)

いつくもつゝのすみかならねはとおもふに
まかせつゝゆくに身をうきしまのほらる
すくとて富士のたかねけふりは雲にき
えければ業平中将の山はふしのねと読
けんおもひいてゝ

かせになひくふしの

けふりのそらにきえ

て

ゆくゑもしらぬ

わかおもひか

な (第25紙)

〔絵十二〕 (第26紙)

むさし野の夜のけしきおほつかななくて
はきのにしきにたちよりて草原はる
かにたちのほる月影をなかわれは

昼よりもけにすみわたりてきは

めなき詠のすゑなりをちの野原の

鹿の音はたかつまこめになきあかし

よもきかもの庵またよはらぬこゑを

とつれてたえぬ秋風はおはなかつゑ

に浪をこしわけゆくたもとやゝ

ぬれて白露はみちしはの葉もせはき

にやおきのうは葉のしづくかこちかほ

ににほひをかけたるふちはかまは

うつりかいとこちたくてからころもたひ

たつわれをまつゝまにもあら「は」かさねぬ

袖もかこたれぬへし道よりすこしわ

けいりて経のこゑしければもし仙人な「と」

の読給にやと尋行てみればわつかに

一間はかりいほりをむすひてさまゝ「の」

あきの草してふきかこひたりうち「に」

九十はかりなる僧我不愛身命但惜無

上道とうちあけたりかたみにあきれ

なからしはしありてこはいかなる人のすみ

給にかとゝへはむかし郁芳門院の侍の長なり

しか院かくれさせ給てのちやかて出家し

てみやこの人にしられさらんところに

後世とらむとおもひて国々めぐり侍しに

この野辺の草花に心をうつして春

夏秋冬のなかめ心すすすといふことなく

侍と申せはさて朝夕の事いかゝし給と
尋るにおもひかけぬみちゆき人などの聞
つけて訪おりもあり又二三日空く侍おり
もありされとも更にくるしみとせず態
煙たつ事はせしと思侍なりと語に浦
山しの心つよさやおほえけり (第27紙)

〔繪十三〕 (第28紙)

野中につねよりもとおほしきつかの
見えしを人にとひ侍しかは中将の
みはかとはこれか事なりと申しかは
中将とはたれかことそと又とひ侍しかは
実方の御事なりと申すいとあはれ
におほゆさらぬたにもものかなしき
しもかれのすゝきほのく見えわた
りてのちにかたらむも詞もなき心
ちして

くちもせぬその名

はかりをとゝめをき

て

かれのゝすゝき

かたみにそ見

る (第29紙)

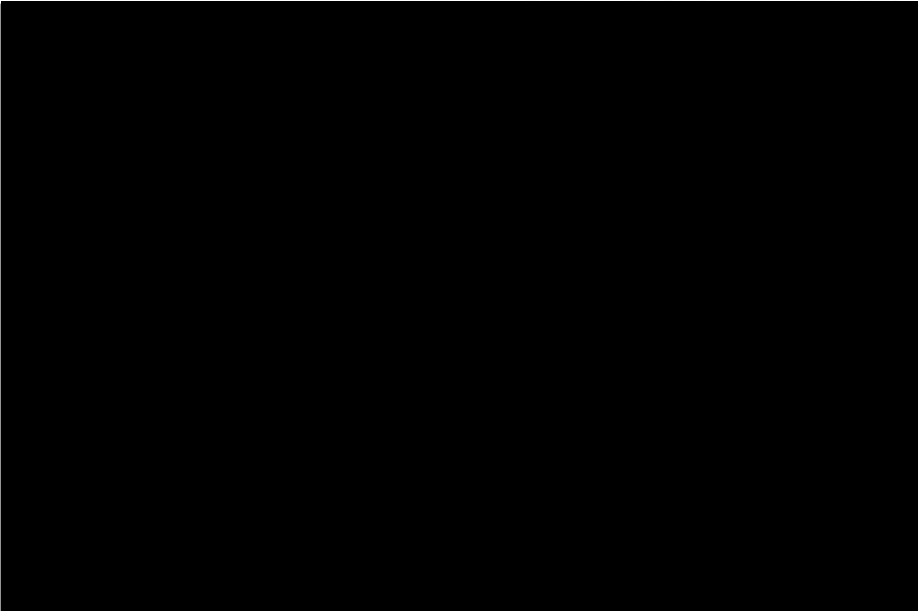
〔繪十四〕 (第30紙)

ウィーン国立民族学博物館蔵
『西行記 夏』
(所蔵番号 113893)
縦32.2糎

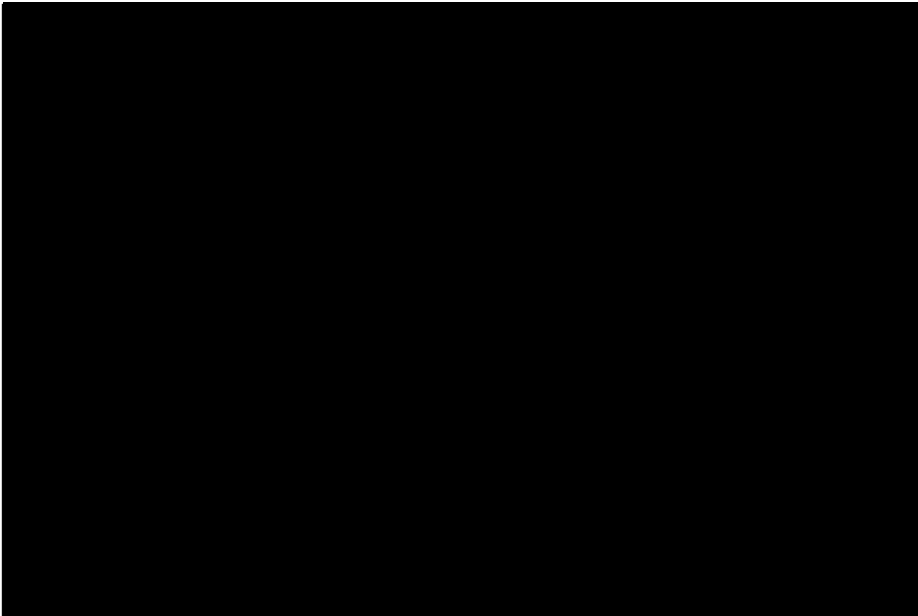
紙数	横(糎)	詞(行)	
第1紙	73.0		25
第2紙	91.5	絵一	
第3紙	46.8		14
第4紙	92.8	絵二	
第5紙	74.0		25
第6紙	90.0	絵三①	
第7紙	49.8	②	
第8紙	39.6		10
第9紙	46.2	絵四	
第10紙	46.0		14
第11紙	46.5	絵五	
第12紙	36.4		12
第13紙	47.6	絵六	
第14紙	50.0		18
第15紙	86.3	絵七	
第16紙	40.6		12
第17紙	45.3	絵八	
第18紙	23.2		8
第19紙	4.3		1
第20紙	44.6	絵九	
第21紙	65.4		23
第22紙	45.2	絵十	
第23紙	36.2		12
第24紙	46.0	絵十一	
第25紙	38.4		11
第26紙	44.6	絵十二	
第27紙	93.0		34
第28紙	89.5	絵十三	
第29紙	41.3		15
第30紙	45.3	絵十四	
合計	1,619.4		234
見返し	37.0	軸付紙	46.7

ウィーン国立民族学博物館蔵
『西行記 春』
(所蔵番号 113892)
縦32.0糎

紙数	横(糎)	詞(行)	
第1紙	93.5		26
第2紙	91.0		28
第3紙	92.0		29
第4紙	94.5		29
第5紙	94.5		29
第6紙	93.0		29
第7紙	80.0		24
第8紙	46.0	絵一①	
第9紙	91.0	②	
第10紙	65.0	③	
第11紙	90.5	④	
第12紙	10.0	⑤	
第13紙	46.0		16
第14紙	80.0	絵二	
第15紙	47.0		17
第16紙	91.1	絵三①	
第17紙	91.0	②	
第18紙	25.0	③	
第19紙	44.4		16
第20紙	51.7		16
第21紙	45.5	絵四	
第22紙	58.3		19
第23紙	62.6		22
第24紙	90.6	絵五	
第25紙	45.0		11
第26紙	93.8	絵六	
第27紙	92.5		33
第28紙	45.3	絵七	
第29紙	87.5		32
第30紙	23.2		8
第31紙	46.0	絵八	
合計	2,107.5		384
見返し	36.5	軸付紙	41.3



續前



〔西行記 春〕 第13紙